

# 増川ヒバ施業実験林の展望 について

増川営林署 増川森林官 高橋 義 臣

## 1 はじめに

青森営林局では、日本三大美林の一つである青森ヒバ（ヒノキアスナロ）を活力ある森林として合理的かつ永久的に維持・造成するために、大正末期以来、松川恭佐氏（当時：青森営林局計画課施業計画技師）を中心に調査・研究を行い、昭和5年に「森林構成群を基礎とするヒバ天然林施業法」の理論を確立し、昭和6年、この施業法そのものの実験を目的として、大畑ヒバ施業実験林とともに増川ヒバ施業実験林を設定した。

増川ヒバ施業実験林は、昭和6年に設定以来、本年で66年を経過し、その間、昭和19～27年の9年間は戦中・戦後のため施業中断を余儀なくされ、更には、昭和29年には台風15号（洞爺丸台風）の被害を受けるなど幾多の変遷を経ながら、施業対象林分は6～7回に亘る主伐を繰り返すことによって、当初の老齡過熟一斉過密林から生育旺盛なヒバ後継樹を主体とした複層林に移相しつつある。

近年、連年成長量が増大しはじめ更新した稚樹群も旺盛な成長をしており、数々の調査・研究を重ねながら一定の成果を収め、まさに新たな森林整備の推進方向のひとつである天然林施業のモデル的存在となっており、最近、管内外からの見学・視察者が増加傾向にある。

一方、昨年4月、地元三厩村、今別町及び隣接の小泊村から連名で「増川ヒバ施業実験林の保存について」の要望書が提出され、当実験林を保護林として永久的に保存してほしい旨の要請があり、営林局・署一体となって検討の結果、この要請に応え「青森ヒバ永久（とわ）の森」（仮称）構想がほぼ固まったので、実験林を管轄する森林官として今後の実験林の展望について提言するものである。

## 2 研究の方法

### (1) 実験林の概要について

- ア 実験林の概要と沿革及び設定目的
- イ これまでの施業経過

### (2) 実験林の存在価値について

- ア 平成9年一年間に、実験林を見学・視察に訪れた各団体の意見・感想の分析
- イ 実験林のPRと各種マスコミ報道

### (3) 地元からの保護・保存要請について

- ア 要望書の趣旨とその背景
- イ 合同植樹祭の開催効果

### (4) 「青森ヒバ永久（とわ）の森」（仮称）構想について

- ア 構想の概要と今後の進め方

## 3 経過及び結果

(1) 実験林の概要について

ア 実験林の概要と沿革及び設定目的

(ア) 実験林の概要

設定 昭和6年 面積 195.68ha (施業林121.67ha 無施業地 74.01ha)  
海拔高 110 ~ 582m 地形 緩斜地 45% 急斜地 37% 険阻地 18%  
地質 輝岩・安山岩が主体, 部分的に凝灰岩・頁岩  
土壌 褐色森林土壌 81% ポドゾル化土壌 18% その他 1%  
気候 平均気温11℃ 年降水量 1,855mm 最深積雪 127cm

(イ) 実験林の沿革

昭和	5年	「森林構成群を基礎とするヒバ天然林の施業法」の確立	
	6年	増川ヒバ施業実験林設定	
	7年	編成案によって施業開始	16年 第1次検訂
	19~27年	戦中・戦後のため施業中断	27年 第2次検訂
	29年	台風15号(洞爺丸台風)被害発生	36~37年 第3次計画樹立
	45年	開設40周年記念植樹等の行事挙行	
	46年	第4次実験林計画樹立	
	57年	第5次実験林計画樹立	
平成	3年	開設60周年記念植樹等の行事挙行	
	4年	第6次実験林計画樹立	

(ウ) 実験林の設定目的

- ① 森林構成群を基礎とする施業法の経営的価値の実験
- ② 最も集約的施業の展示林の造成
- ③ ヒバ天然林に関する各種試験・研究の継続とその完成

イ これまでの施業経過

(ア) 施業実験計画

当実験林は全林分を地形によって11個の林班に区分し, 更に林型によって275個の小班に分け, 回帰年10年をもって施業することとしている。

ただし, 11林班は無施業林として施業循環林地より除外しており, 残りの10個林班について1年に1個林班ずつ主伐を入れ, 10年で循環する連年作業としている。なお, 現在は伐採率10%の択伐施業を取り入れている。

当実験林の期待する林分の姿は, ヒバ(80~90%)と有用広葉樹(20~10%)が概ね群塊状に混交する用材林, ha当たりの蓄積300~450 m<sup>3</sup> ha当たり年成長量10 m<sup>3</sup>前後, 目標径級70 cmであり, 究極の目的は, より生産性の高い森林への改良を進めるための, 安全で確実な方法や技術の追求であり, 今なお実験途中である。

(イ) 最近の伐採実績

年 度	伐 区	伐 採 率(%)	面 積 (ha)	材 積 (m <sup>3</sup> )			販 売 額 (税抜き) (円)	集材方法	備 考
				ヒバ	L	計			
8	5	9	9.32	189	8	197	12,200,000	トラクタ	トラクタ道 300m
9	6	10	9.95	109	51	160	7,430,000	集材機	集材機用林道

(2) 実験林の存在価値について

ア 平成9年一年間に、実験林を見学、視察に訪れた各団体の意見・感想の分析

(ア) 平成9年に実験林を見学・視察に訪れた主な団体・会社（外部）

月 日	団 体 ・ 会 社	参加数
5. 18	平成9年度青森営林局第1回森林教室	65名
5. 20	三厩村・村議会現地視察	20名
5. 29	三厩村・営林署合同植樹祭記念森林浴（昼食会場）	220名
7. 9	南雲東大名誉教授ほか2名視察	3名
7. 27	前橋「森林の会」森林観察会	15名
8. 22	盛岡市森林組合青年部林業先進地視察	10名
9. 2	青森県教育センター高校教員理科野外実習	12名
9. 21	東青地区農業委員会若者交流会森林ウォーキング	26名
9. 30	日本林業経済新聞記者視察	2名
10. 9	総合出版（有）風土社 取材視察	2名
11. 4	宮城県岩出山町議会林業先進地視察	15名
7～12	東奥日報社編集局「あおもり110山」現地取材	4回

私が着任した平成9年4月以降は以上のとおりであるが、このほかに林野庁、森林総合研究所、営林局からの視察も数回あったところであり、前年度には、九州の大分県や関東の埼玉県からの林業関係団体の視察者もあったと聞いている。

(イ) 見学、視察者の意見・感想等

- A 大変貴重かつ素晴らしい実験林である。
- B 小径木の密生している部分は間伐及び枝打ちをした方が望ましいのでは？
- C 貴重な実験材料が沢山あり、専攻する学生があれば是非調査研究させたい。
- D これまでのデータは途切れないう継続し残しておいてほしい。
- E 森林教室等の開催に当たっては、植生等を一方的に教えるだけでなく、森林

施業のあり方を現地で比較できるように林型で示しながら、何が必要か考えさせる方法が最良である。

- F この実験林が未来永劫に亘って維持されることを願う。
- G 増川から実験林までの林道は大型バスが入れるよう整備してほしい。
- H 実験林は鋸岳、矢形石山の登山道となっているが、必要以上に開削して広げるのはやめてほしい。遊歩道も現状の補修のみで足りると考える。
- I 天然林でも必要な手を加え誘導してやることが如何に重要であるかが多少理解できた。
- J 標識は常に点検して、数ではなく初心者でも分かりやすいよう必要なところに正確なものを設置してほしい。

#### イ 実験林のPRと各種マスコミ報道

これまでの実験林に関するPRとしては、既成のパンフの利用は勿論のこと、更に詳しく分かりやすい手作りの資料を作成するとともに、森林教室で使用した資料を適宜抜粋して追加資料として利用した。その部数は約300部にも及んでいる。

各種マスコミ報道等については、4.20付け東奥日報の「ヒバ実験林保存要請」記事をはじめ、5.29付け東奥日報の「合同植樹祭」、9.21付け東奥日報の東青地区農業委員会の「森林浴ウォーキング」、12月には住まいの総合雑誌「チルチンびと」に「天然の青森ヒバを持つ、頑張る国有林」として写真入りで1頁紹介された。

更に、10.1.24付け東奥日報の「あおもり110山」鋸岳の紹介の中で「全国に誇るヒバ実験林」として大きく紹介された。

### (3) 地元からの保護・保存要請について

#### ア 要望書の趣旨とその背景

平成9年4月8日付けをもって、地元三厩村、今別町及び隣接の小泊村から連名で「増川ヒバ施業実験林の保存について」の要望書が、営林局長及び営林署長あて提出され、当実験林を保護林として永久的に保存してほしい旨の要請がなされた。

要請の内容は、営林署への配慮等から表現は多少柔軟になっているが、本音は禁伐・保護林的な厳しい要望であり、過去に青森ヒバ（増川ヒバ）のメッカとして栄えた村の歴史の名残を、せめて大径木の残っている実験林に求め、後世に伝える文化遺産として永久的に保存してほしいとの切なる願望である。

また、当該流域の河口から約2Km周辺は増川川河川整備事業の一環として、旧増川苗畑を含めた河川公園等の整備が着々と進んでおり、村としては、将来、体験学習や森林浴等ができる総合的な森林レクリエーション基地として活用したいという構想があり、将来的には増川から小泊までの「増泊林道」の県道昇格を呼びかけていく考えである。

#### イ 合同植樹祭の開催効果

昨年度まで営林署独自で、三厩村と今別町で交互に開催していた植樹祭であったが、当署からの希望と三厩村の意気込みが一致し、5月29日、初の合同植樹祭を

開催した。「森は海の恋人」をキャッチフレーズに漁師の皆さんが大勢参加し、国有林野率91%という臨海山村での共存・共生の必要性を実感したところである。

この結果、従来からの降雨時の河川の濁りなどのトラブルについても、漁協等と率直に話し合える雰囲気醸成された。また、森林・林業についても広く村民に一段と理解が深まり、学校部分林の活用やら「みどりの少年団」結成の動きも出てきて、山づくり・緑づくりへの関心が高まってきている。

#### (4) 「青森ヒバ永久(とわ)の森」(仮称)構想について

##### ア 構想の概要と今後の進め方

平成9年4月8日付けの地元三厩村ほかからの「増川ヒバ施業実験林の保存について」の要望に対して、これを真摯に受け止め、むしろこれを契機に国有林としても積極的にアピールし、時代の要請に応じた地域振興の一環として、地域における森林利用のあり方を新たに提案しようということ局・署の考えが一致した。

その提案とは、「青森ヒバ永久(とわ)の森」(仮称)構想であり、既存の保護林制度とは全く別個な新たな発想であり、その概要は次のとおりである。

#### 「青森ヒバ永久(とわ)の森」(仮称)構想

##### 1 趣旨

青森県が誇る日本三大美林の一つである青森ヒバ林を永久的に維持・保全し、未来に向けて伝承していくことによりヒバ林の保全と利用の調和に資する「青森ヒバ永久の森」を設定する。

##### 2 設定箇所及び面積

日本におけるヒバの代表的な産地である青森県の津軽半島(三厩村内)と下北半島(大畑町内)の国有林に各1箇所、計2箇所(約420ha)を設定する。

##### 3 施業方法等

###### (1) ヒバ林の生態系の維持・保全

原生的保存地区と施業モデル地区に区分して、それぞれ適切な施業を行うことにより、ヒバ林の生態系の維持・保全を図る。

###### ア 原生的保存地区(約90ha)

高齢で巨大なヒバ個体を寿命に達するまで育成・保存するなど、ヒバ林に対して自然の推移に委ねた取り扱いを行う。

###### イ 施業モデル地区(約330ha)

ヒバ林の生態系の動態に即応した適切な施業を行い、多様性に優れた健全なヒバ林を永久的に維持・保全する。

###### (2) ヒバ林の価値・文化の伝承

ヒバ林から創出される多様な価値の賢明な利用を助長することにより、ヒバ林と人とのより良き関係を伝承する。

ア 森林浴、林間の散策等によるヒバとの接近・交信(他感作用の利用等)

- イ 試験研究等によるヒバ社会の究明及びヒバ文化の創出
- ウ 持続的生産活動として行われる木材、山菜利用等の展示・実演・体験等によるヒバとの生活・文化の共有
- エ 自然観察教育，研修，その他観光（文化的な出会い）宣伝等によるヒバの価値・文化についての情報発信

#### 4 まとめ

これまでの経緯から、「試験・研究の継続」と「保護林化しての利用」の問題点を要約すると

- (1) 青森ヒバのサイクルを約200年とすれば、当実験林は、実験を開始してからまだ66年しかたっておらず今なお実験途中であり、この貴重な実験成果を途絶えさせる訳にはいかず、禁伐とする考えは全くないこと。
- (2) この森林は一営林署だけの実験林ではなく日本全体の施業試験地であり、松川先生をはじめ諸先輩方が苦勞して継続してきたものを、私たちは後継者にバトンタッチしていかなければならない義務があること。
- (3) 一方、国有林は「国民の森林」であり国民共通の財産であることから、広く国民の利用に供するとともに地域振興にも資するという役割を担っていること。
- (4) 今後の事業運営に当たっては国民の参加が必要不可欠であり、そのためには、特に地方自治体との連携を強化し、地域住民が体験を通じて森林・林業について理解できる施設等の整備が必要であること。

以上のことから、増川ヒバ施業実験林の展望について私なりにまとめると、当実験林は、これまで「施業実験」というどちらかというと国有林内部だけの利用を主目的として取り扱われてきたが、今後は地域（外部）に開かれた国有林として広くアピールし、貴重な実験林としての目的を果たしながら地域振興にも資するという方向で検討するのが最善ではないかと思われる。

今後の進め方として、「試験・研究の継続」と「保護林化しての利用」の両面を調整するために、村と署双方が一体となって整備協議会を発足し、改めて共同で現地を視察の上、「青森ヒバ永久（とわ）の森」（仮称）構想をひとつのタタキ台として、その活用方策を検討しつつ具体化を図っていくのが最も望ましいと考えられる。

#### 5 おわりに

この一年間、初めての森林官として、このような貴重な実験林を管内に持ち、森林教室や見学・視察者の案内、マスコミ等の取材を通じて、これからの国有林のあり方を考える良き機会となり、本署の指導を得ながら大変いい勉強になりました。

今後とも地元との連携を大切にしながら、全国に誇る伝統ある「増川ヒバ施業実験林」を更に発展させ、しっかりと受け継いで行きたい。

# 増川 営林署管内図

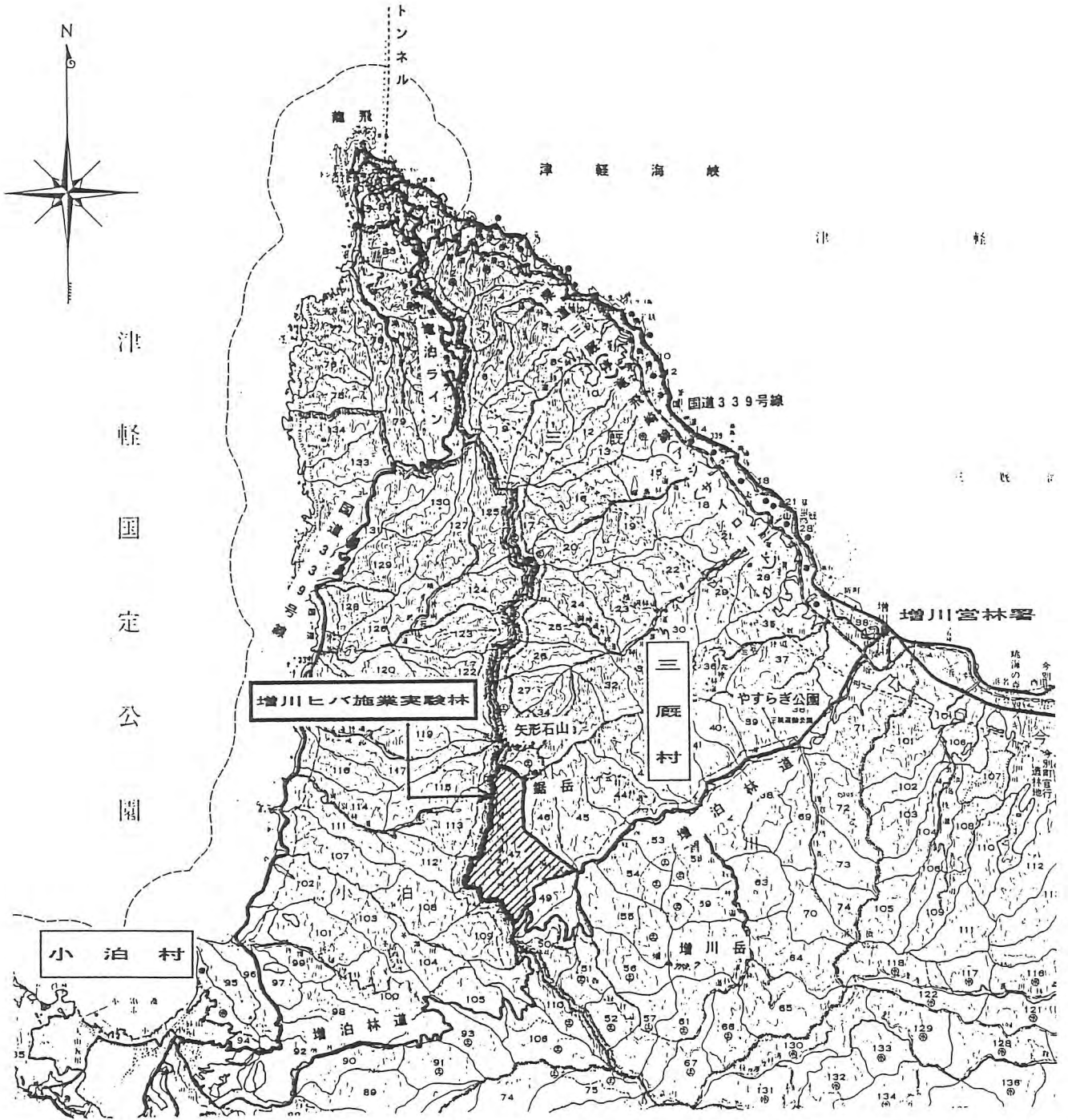


図 — 1 増川営林署管内図

# 増川ヒバ施業実験林

青森県東津軽郡三厩村増川字増川山国有林47林班

面積 195.68ヘクタール

(施業林 121.67ha, 無施業地74.01ha)

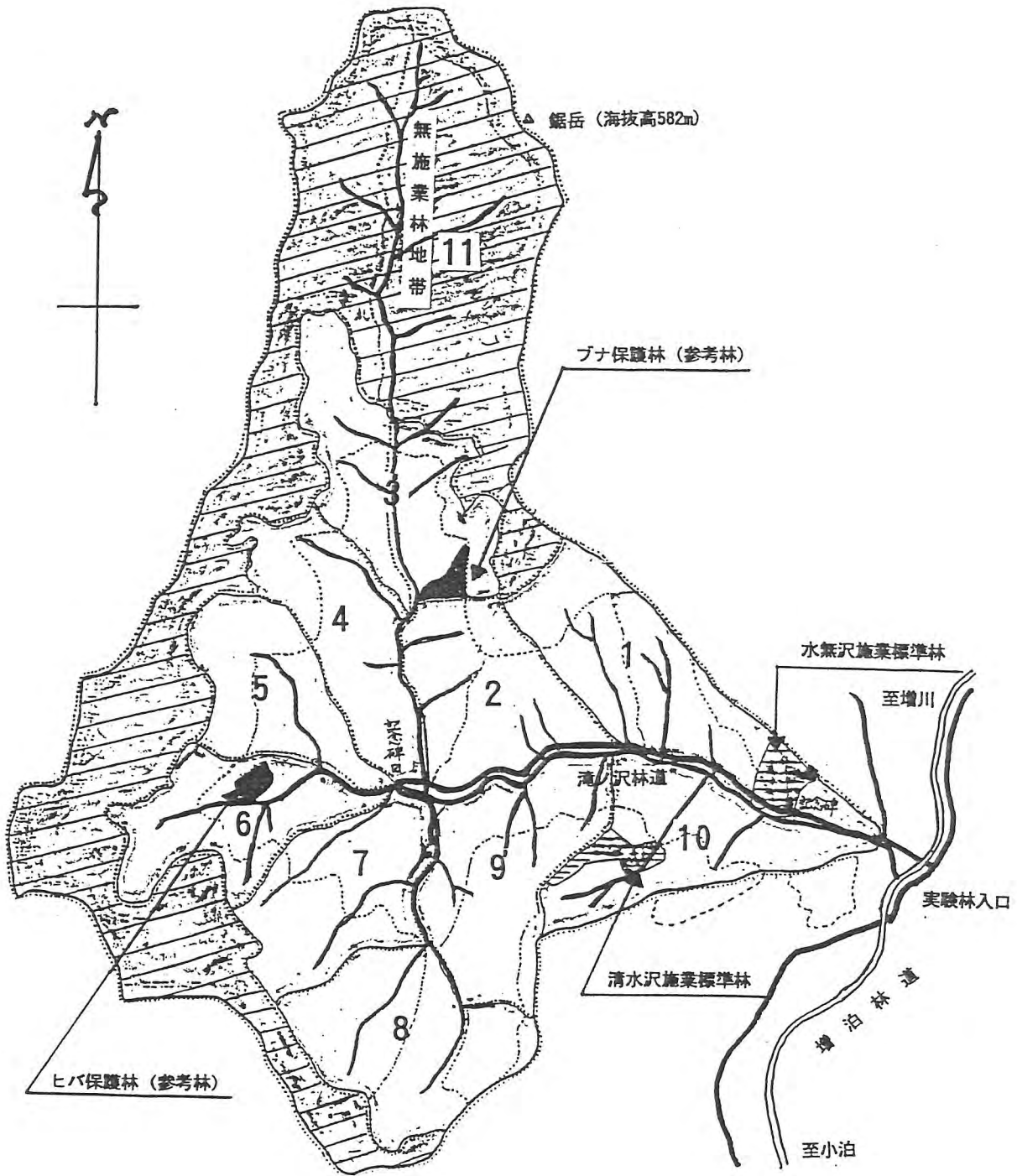


図 一 2 増川ヒバ施業実験林管理図



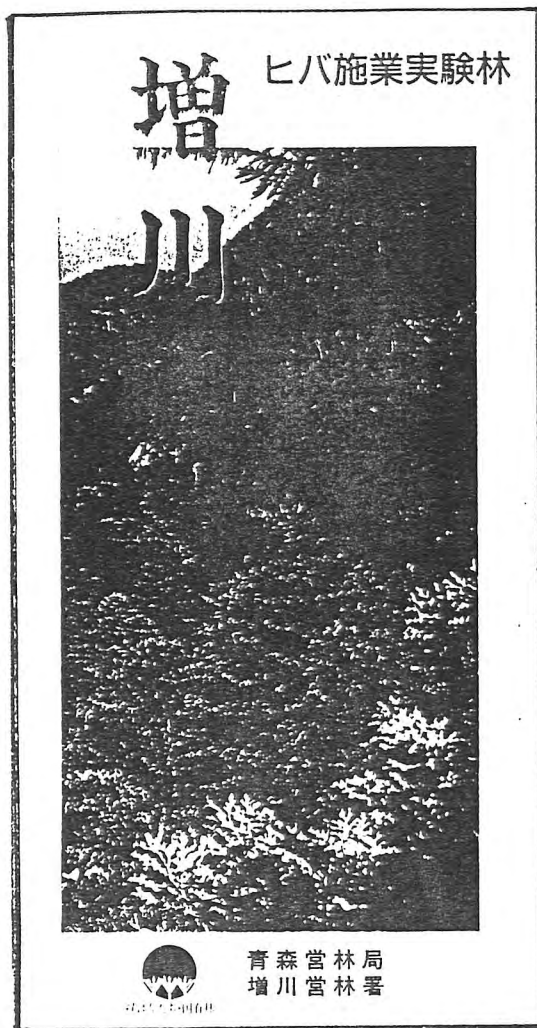
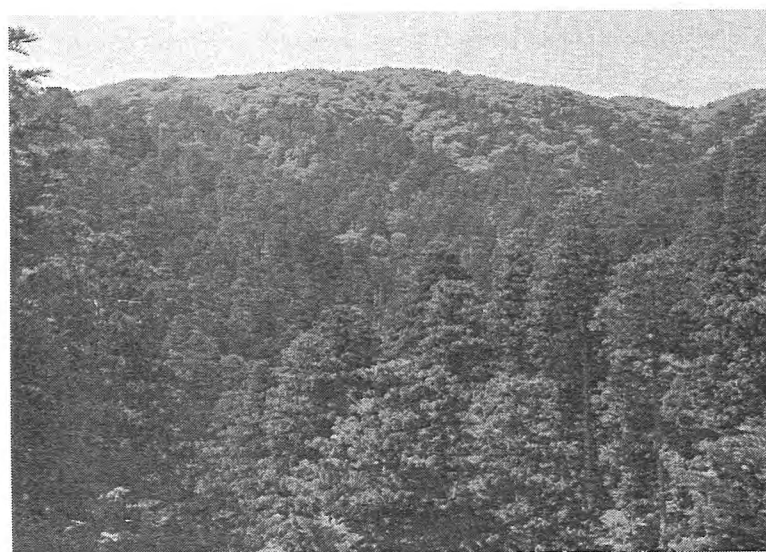
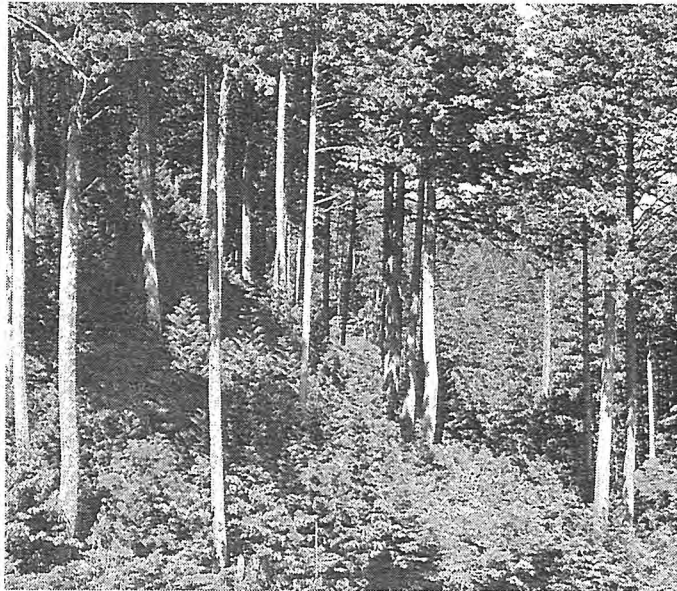


図 — 3 増川ヒバ施業実験林パンフレット  
 (←表 内容省略 裏→)



1林班展望所から7林班を望む

写 — 1



写 — 2

ここは設定当時、僅かにヒバの稚樹が生えていた箇所ですが施業の繰り返しによって稚樹群が発生し旺盛な成長をしています。



写 — 3 平成9年度 青森営林局 第1回森林教室



写 — 4 施業標準林 案内